学びや タイムスリップ

⑥⓪ 寄贈された扇面 （大正時代～）

地域への思い込め描く

扇面は古来より、よく贈答品として用いられてきました。和歌や漢詩などを書いたり、美しい絵を描いたりして、大切な相手に贈られてきたのです。

京都の小学校でも、明治時代から創立の周年記念や校舎の新築、改築記念などの慶事の際に扇面を作成し、記念品として関係者に配布する慣習がありました。扇の末広がりの形に、学校の長い繁栄への願いが込められたのです。扇に描く原画は地域ゆかりの作家に依頼され、そうした扇面原画の多くは学校で大切に保管されていました。

左京区の下鴨小には近代京都の画家、福田平八郎が描いた扇面の作品が所蔵されています（写真①）。1927（昭和2）年、新校舎が建てられたことを記念して寄贈されたもので、謹直な字で「下鴨小学校竣工記念」と添えられています。

描かれているのはフタバアオイ。下鴨神社の神紋で、5月の葵祭のときには人々の身を飾る、下鴨地域を象徴する植物です。今は激減しましたが、かつては周辺に多く自生しており、身近なものとして住民に愛されていました。

この絵が描かれたのは旧暦の初夏（4月）です。ちょうど開花を迎えた様子が写されており、葉の付け根から柄を出したかれんな花が描かれています。福田平八郎はこの時期、下鴨芝本町に住んでおり、本作には地域への思いがよく表れています。

上京区の春日小（現在は中京区の御所南小に統合）には画家、西村五雲が描いた扇面画が所蔵されていました（写真②）。「神鹿図」と題され、張り子の鹿が描かれており、校名に通じる奈良市の春日大社で、鹿が神の使いとして信仰されていたことに由来するものです。五雲は学校にほど近い、新烏丸頭町に住んでいました。

画家が学校へ贈ったり、学校が学区民に贈ったりする扇には、地域に根ざした豊かな思いが込められているのです。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）

◇

今回紹介した「双葉葵図扇面」「神鹿図」は27日まで学校歴史博物館（下京区）で展示します。

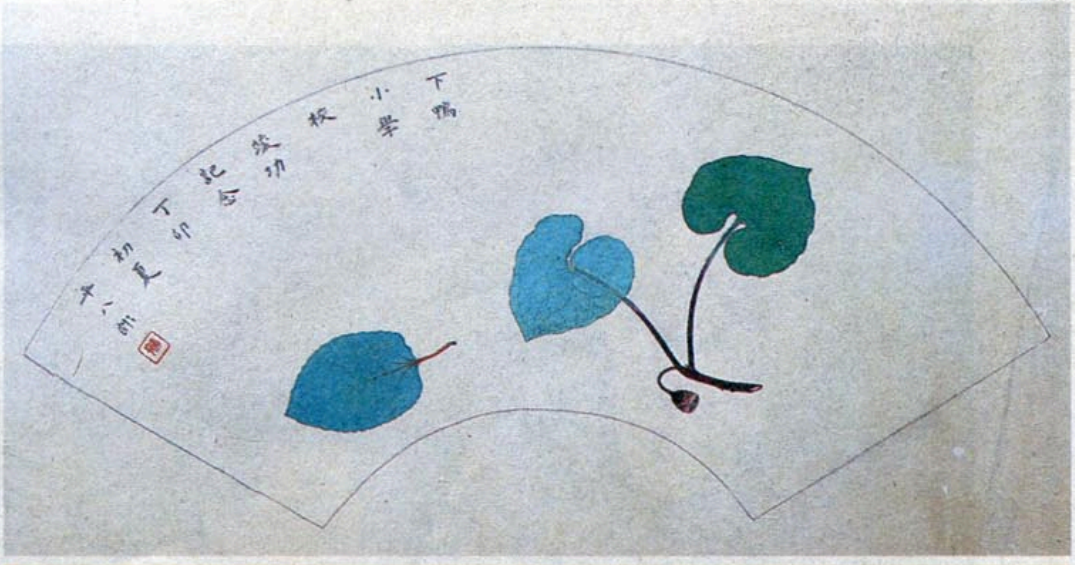

写真1　福田平八郎「双葉葵図扇面」（1927年、下鴨小蔵）

写真2　西村五雲「神鹿図」（大正～昭和初期、元春日小蔵）